

女子部が行く！

学会探訪記

第5回 調査研究運営委員会



レポーター 五十嵐悠紀（明治大学）

女子部が潜入する「学会探訪記」もすでに5回目。今回は9月30日に東京・御茶ノ水、化学会館で行われた「調査研究運営委員会」の中の「情報環境領域委員会（IE領域）」にお邪魔してきた。委員長を囲むようにずらりと並んだ方々の席札には「ヒューマンコンピュータインタラクション研究会主査」「グラフィクスとCAD研究会主査」などが並んでいる。

領域ってなに？

そもそも「調査研究運営委員会」とはどのような役割を持った委員会なのだろうか。IE領域委員長である明治大学小林稔先生に直撃インタビューさせていただいたところ『ボトムアップでいろいろな企画や仕組みを考えているのが調査研究運営委員会の活動』なのだという。研究の中身ややり方というのは時々刻々と変わってってしまうものである。そのため、それを一番肌身で感じている研究の現場に近い『研究会』という単位で、場所に応じたスタイルを模索し、運営していく、というのがこの仕組みの目的なのだ。

「本会ができた当初は、研究会が現在ほどたくさんあったわけではないのですが、情報処理分野の発展とともに研究会の数や活動範囲も広がってゆき、財政基盤も含めより強固な運営体制が必要になってきたんですね。40年ぐらい前に調査研究運営委員会ができ、20年ほど前に領域性がスタートしたんですよ。領域性は、対象領域の近い研究会をグループにして、それぞれに権限や責任を与えて活動する方が良いという考えで始まっています。つまり、それぞれの領域の個別の状況に合わせて工夫して活動を行っていく枠組みなんです」（小林委員長）。

図-1のように、IE領域のほかに「コンピュータサイエンス領域委員会（CS領域）」や「メディア知能情報領域委員会（MI領域）」が存在し、それぞれ領域ごとに雰囲気が違うという。IE領域はユーザインタフェースの話やメディアの話が多く、スマホのアプリコンテストなど、コンテストや賞を企画することが多いそうだ。MI領域についても

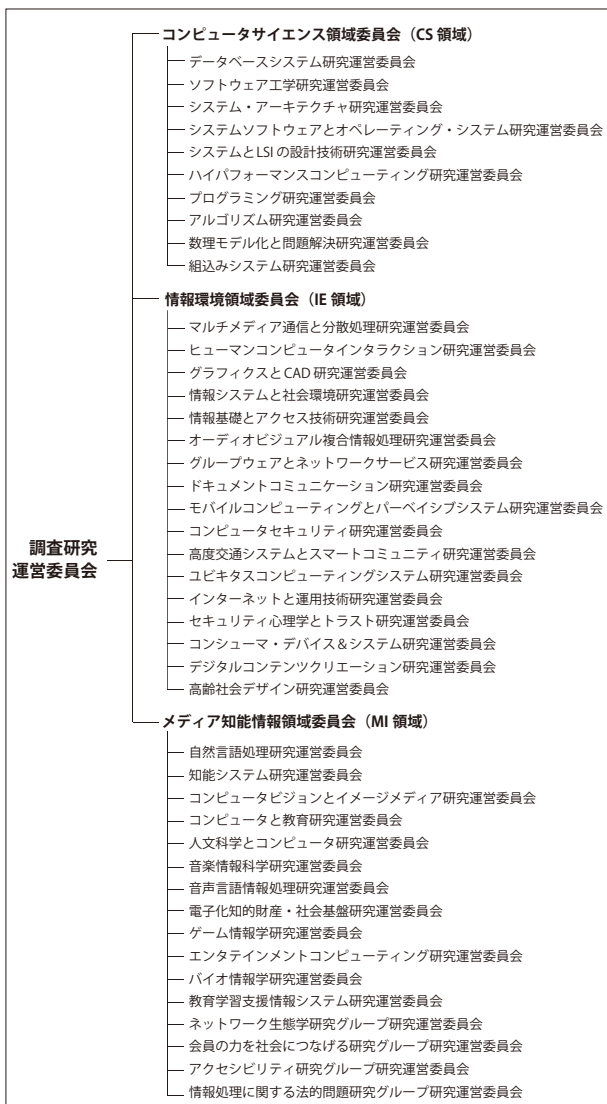


図-1 調査研究運営委員会は3つの領域に分かれており、それぞれに研究運営委員会が多く存在する組織である

MI 領域委員長である片寄先生にお聞きしたところ、「MI 領域の前身はフロンティア領域です。従来のくくりに入らない研究会が創設されたり、動画配信を始めたりと、なにかと新しい取り組みが行われています」と教えていただいた。

複数の研究会を領域ごとの単位に分けることで“ちょっと価値観を共有しているコミュニティ”で、集中して議論ができるのが最大のメリット。IE 領域では「シンポジウムが活発」という特徴がある。DICOMO や、インタラクションといったシンポジウムではいろいろやり方を変えたり、日々進化したりしながらスタイルを確立してきた。個々の研究会では賞を出したり、ポイント制^{☆1}を導入したりと、同じような価値観を持った人たちが集まって、より良くしようと工夫し続けており、分野の活性化につながっている。

研究会同士で運営ノウハウをシェア

実際の会議の様子をお伝えしよう（図-2）。最初は承認事項から始まった。研究会の名称変更や継続のお願い、取り扱い分野のキーワード変更など、それぞれの研究会の主旨が状況を説明し、承認をしていく。研究会の名称変更やキーワード変更・追加によって、参加や発表が増えるのだという。こういった研究会運営のノウハウや、ほかの研究会がどのようなことをやっているのかなどは研究会の枠を越えて共有されている。

研究会の活動は本会においてとても大事な部分であるため“うまいやり方をシェアし、真似していく”ことはとても大事とのこと。委員は毎年入れ替わるし、研究会同士独立に委員会を行っているとはほかの研究会が何をやっているかはそのままではあまり分からないため、研究会の枠を越えた「活動事例集」を作り、ざっと読むだけで新しい委員でもノウハウやヒントが得られるよう共有しているという。

^{☆1} GN 研究会ではシンポジウムで参加すると何ポイント、発表すると何ポイント、とポイントが獲得できるのだそう。
<https://www.ipsj.or.jp/award/gn-award1.html>



図-2 IE 領域委員会の会議の様子。資料はすべて電子化されており、みなさん PC 上で資料を閲覧していた

承認事項のあとは 2015 年の活動に関する報告事項が行われて、会議は進んでいく。

領域内の裁量で決められる予算

IE 領域での分野の活性化のための 1 つに「IE プロジェクト」という予算がある。この予算を何に使うのか、というのは IE 領域だけで決定できるという。IE プロジェクトはまだできて 3～4 年の予算であるが、そのお金をうまく使って、“これまでみんなができなかったことの背中を押そう”という施策なのだそう。「こういうのをやりたいと思う」「こういうことをやっている」のほかに「〇〇は駄目だった」「そのお金の使い方はおかしい」などとさまざまな角度から議論することで、どうやったらうまくいくのかといったことを日々模索している。似たような研究会の集まる「領域」という単位でこのようなことをみんなで考え、実践していくことが大事だという。

今年度（2015 年度）の公募では、研究会および領域の活性化・発展につながることを熟考した 6 つのプロジェクトが提案され、スマートフォンアプリコンテストや学会併設託児所、ワークショップ講師の招へい費用などに予算が配分された。提案された企画はどれも良い企画が多く、会員増・活性化につながると判断され、提案予算からの減額はあったものの、0 円という回答はなかった。「資金を有効にご活用いただき、本会の活性化につなげてください」と小林委員長はおっしゃっていた（図-3）。



図-3 ホワイトボードで予算の説明を始める小林委員長



図-4 会議終了後も委員長を囲んで委員会では言い切れなかったさらなる議論が行われていた

会議資料は電子化

ネットワークの環境が整備されており、資料はすべて電子化されていたのが特徴。机の上には当日の議題、および資料一覧が書かれたA4の紙1枚の資料があるのみ。我々女子部が属す、会誌編集委員会では分厚い資料が毎回配布されているのでびっくりしていると、「以前はIE委員会でも分厚い資料が配布されていたんですよ」とヒューマンコンピュータインタラクション研究会主査でいらっしゃる河野先生が教えてくださった。遠くから出張してくる先生方も多いため、分厚い資料を持ち帰るのが大変。どうにか電子化できないものか、という声上がり、今では完全電子化されているとのこと。会議のやり方1つでも提案され、それが実践されている、そんな風通しの良い会議であった（図-4）。

まずは気に入った研究会に参加しよう

最後に小林委員長から読者のみなさまへメッセージをいただいた。「まずは気に入った研究会や関

連する研究会に参加してください。参加し発表してもらおうことがとても大切なんです」。

学会に参加し、発表するというのは、学生さんを含め、我々研究者側のメリットとしては、これまで研究してきた内容が発表できるといったことが挙げられる。しかし、研究会側のメリットもあるという。参加して、その人なりの発表をしてもらえれば、研究会側としては「これからこういう発表が増えてきているからきっとこういうことをしないといけないよね」といった情報が得られるというのだ。デモを中心にしないと進化が分からない、など、研究の内容に合わせて必要とされていることを汲みとって、学会・シンポジウムの運営の中でチャレンジしていくそう。このように研究会や領域という枠組みは“学会やシンポジウムが研究する人たちに合わせていくための仕組み”でもあると教えていただいた。

本会学生会員には研究会を1つだけ無料で登録できる特典がついている。まだどこにも登録していない人はぜひこの機会に見直して、自分の一番興味がある研究会に入ってみてほしい。

(2015年10月6日受付)

